

第56回水戸市芸術祭 文学大会「短歌」の部

- 1 鮮やかなこの紫が好きだから明日着てゆかむ姉の形見の
御代田 澄江
- 2 「魚久」の奥さんになり底ぬけに笑ふアハハハ朝の音読
鷺沼 あかね
- 3 黒い雲夕陽押し上げ「虹」架ける東京湾から霞ヶ浦へ
海老原 輝男
- 4 花吹雪楽しみいるか四季の原散歩の吾にプードル戯れ来
益子 威男
- 5 一時を集まり離れゆく人の時が重なる空港という街
幡谷 悦子
- 6 夫の君は週末に決つて母見舞ふ台湾バナナ手みやげにして
三井 弥生
- 7 頬被りして雪搔きをする間さえ北国の女は笑みを絶やさず
宮田 泰子
- 8 玉石の清しき音の沁みゐたり社殿へ歩む新成人と
佐川 あけみ
- 9 声だせぬ母の目頻りごめんねを言っているのか真冬の個室
田口 敏
- 10 亡き伯父の遺せし物の量よりもふるさと水戸に帰る数の少なし
白川 鼎心
- 11 贅沢な老いの孤独と戯れて終着駅は豊かなる闇
小森 幸子
- 12 「髪染めたの」と問いたれば髪かきあげてポーズとる素っぴんの嫁
石川 萬里子
- 13 幼き日鶉の衣は当たり前今や破れがファッションとふ
川松 三男
- 14 友と摘み友と揉みたり一番茶 三時にふふむ茶碗《わん》のみどり香
柴沼 幸子

15 摘みし花また植えなおし不可逆の日々ゆるやかに老いてゆく祖父 矢澤 愛実

16 要介護の母が歩行車押し行くを見守る先に紫陽花が咲く 大谷 敏幸

17 雪溶けのぬかるみ思うかきごおり白皿さらに残れる足あとたのし 小林 暁子

18 友という言葉いただく面映さ秘めてほっこり心も頬も 永井 桂子

19 色分けて淡紅の合歓盛り咲く日当たる花と陰に見る花 吉田 早智子

20 ぼうたんの花を数える夫と吾つま数合わざれば桃色笑まう 桐原 勝代

21 祖父死んで三十年経ちおすもうを観てもひとりも力士被らず 鈴木 智子

22 やさしさは強さと共存できぬのかふやけた紙のストローを噛む 後藤 由美子

23 九十の姉より習字の手ならいす短歌の作品展示のために 坂場 正具

24 おんぶして絡めた孫の腕温し優しく甘くこのまま居たし 佐藤 美智子

25 初めてのリハビリにむかう重き足背中押されるさつきの赤に 渡部 はるみ

26 夏の風若葉ゆれるようらおもてそんなに急くな柿の花おつ 飯泉 知子

27 おつかいはお米やさんに米一升何悲しいか五歳の記憶 大吉 政枝

28 塞き止めて水浴びをせし幼き日源氏川今流れの寂し 大森 幹雄

29 はとこ来て十色クレヨンじっしょく持ち出すも彼の道具はアイビスペイント 大津 良音

- 30 我こそはリング皮むきチャンピオン友に伝える四月一日
金子 剛士
- 31 白昼にまといしTシャツ夜風うけさらりとなびく夏の終わりに
久江 楓
- 32 「別れよう」言葉と共にチョコレート甘さと苦味が混ざり合ってる
長谷川 創太
- 33 杉山にバナナトラップ仕掛ければ早起きできた小学二年
深澤 仁
- 34 アレグロの祭り囃子とエレクトーン今夜限りのアンサンブル
山崎 望
- 35 青でなく黄色い海もあるのだと上海帰りの祖父は語りき
佐久間 郷子
- 36 久々に米寿迎えし兄貴より「短歌入選」とライン届きし
高野 フク
- 37 雨上がり朝日を反し艶やかな青葉に凜と皐月花咲く
海老澤 貴子
- 38 とろとろに煮たるスープを届ければ母は微睡む赤子のように
灰原 啓子
- 39 十数年掛けて染みつく「ノックオン」冬が来るたびいつまでも言う
青山 仁
- 40 山巔にふたり眺めし明星をわれ見上げれば君見おろさん
福田 樹生里
- 41 並びおり山椒みその芋がらめ亡祖母のおはこは芽吹きと共に
木村 祥子
- 42 はるかなる月の雲居（くもゐ）に隠れたし家路を急ぐ我が身なりけり
倉澤 正樹
- 43 牡丹花はみな方々を向いて咲き確かな答へ持たざる吾ら
廣間 菜月
- 44 ノンアルでお願いしますと腕出せばガッテンショウチと採血検査
佐藤 恵美子

すっぽりと帽子を被るは末期なる癌のわたしを隠したいから